



牧場体験 ～ミルクツーリズム～

皆さんは市内でどれくらい牛が飼育されていると思いますか。その数は、肉牛と乳牛を合わせると約八千頭、県内でも5番目の多さです。

(社)中央酪農会議では、牧場の持つさまざまな資源を教育的に利用しようとして、「酪農教育ファーム」という認証制度を実施しています。県内で初めてこの酪農教育ファームに認証された牧場が、柚木地区にあります。

昨年11月に行われた「させばエコツーリズムフォーラム」のエコツアーでは、この牧場体験の申し込みが一番多かったそうです。ここでは、そのときの様子をご紹介します。



乳搾り体験(写真上)、牛のえさやり(中)、生まれたばかりの子牛への哺乳(下)

牧場主から牛の生態などの説明を受けた後、さっそく牛舎へ。「モオ〜」と迫力のある牛たちが参加者を迎えてくれました。

そして、皆さんお待ちかねの乳搾りを体験。コツは、人さし指から小指まで順番に握っていくことです。朝からまったく搾っていない牛からは勢いよく乳が出ました。触れ合いで、牛にもすっかり慣れた参加者の皆さんは、牛のエサやりや、11月に生まれたばかりの子牛への哺乳なども体験しました。

最後は、バター作りにも挑戦。牛乳と生クリームが入った容器を振って作るのですが、なかなかバターができません。皆さん悪戦苦闘していました。でもその分、出来上がったバターの味は格別だったようです。

参加者の皆さんは、普段ではできない牧場での体験を、存分に楽しんでました。

【体験者の声】
南朋音さんは「身近に牧場があることを知りませんでした。牛乳パックに牛が載っているの、子どもにはなかなか分かりません。牧場体験を通して子どもの疑問に答えられてよかったです」と話してくれました。

牧場経営者

里村 貴司さん(右)
里村 睦弓さん(左)



牛乳は工場できていると思っている子どもたちに、牛が飼育されている様子などを見学してもらい、牛乳ができる過程を知ってほしいと思っています。たくさんの方に体験してもらい、牛乳により親しみをもってもらいたいです。



聴診器で子牛の心音を聞き、その音が人間よりも速いことを確認しました



バター作りに挑戦する南朋音さん(写真左)、晃さん(中)、仁くん(右)



「おいしい！」出来上がったバターは、牧場内で試食しました



環境学習 イン ハウステンボス

環境保全と滞在型リゾートを基本理念とするハウステンボスは、水のリサイクルや生ごみのコンポスト(たい肥)化など、さまざまな環境保全の取り組みを行っています。かつては荒地だったハウステンボスの土地には、現在、豊かな生態系がよみがえり、はぐくまれています。

ハウステンボスでは、市内の小学4年生を対象に環境学習を実施しています。環境設備見学や運河での生物観察など、場内の資源を生かした多様なプログラムが用意されています。

ここでは、昨年10月31日に参加した、日野小学校4年生の環境学習の様子をご紹介します。



運河に生息するウニを観察(写真上)、ウミウシ(中)、場内の水門を見学(下)

皆さんは、運河を流れる水が大村湾の水だということをご存じですか。ハウステンボスでは水質を保つために、場内に2カ所ある水門で潮位差を利用して定期的な水の入れ替えを行っています。また、水際に自然の石と土を使うことで、自然に近い生態系が守られているのだそうです。

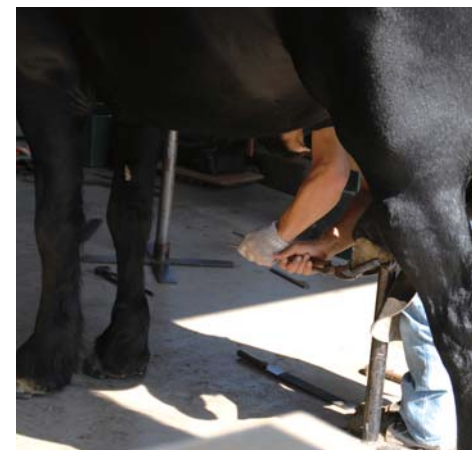
子どもたちは網とバケツを手に、運河の中の生物を観察しました。この日採れたのは、タツノオトシゴやウミウシ、クボガイ、タコなど種類も数もたくさん。子どもたちは、初めて見たり触ったりする生物に目を輝かせていました。もちろん、採った生物は観察後、すべて運河へ。

オランダ原産馬の「フリーシアンホース」のきゆう舎では、馬のひづめに装着する蹄鉄の交換の様子を偶然見ることができました。ハウステンボスでは、交換し終わった古い蹄鉄は捨てるのではなく、色付けをし

て場内で売っているそうです。

また、独自の下水処理場で下水を浄化し、場内のトイレや草花にまく水として再利用することや、生ごみをコンポスト処理場に持ち込み、たい肥化する取り組みについてもガイドから説明がありました。フリーシアンホースのきゆう舎から出る馬ふんや敷きわらはは、生ごみのたい肥化に役立っているそうです。

子どもたちは、物を無駄にしない再利用の取り組みに感心している様子で、環境に配慮した取り組みの大切さなどを学んだようでした。



▲フリーシアンホースのきゆう舎などを見学
◀馬の蹄鉄の交換の様子



生ごみをリサイクルしてできたコンポストのにおいを確かめる児童の皆さん